

全国まちづくり
若者サミット
2 0 2 1

事業報告書

全国まちづくり若者サミットの開催まで

これまで日本青年館では、青年団をはじめとする青少年活動の支援に長く取り組んできました。平成以降では、青年教育に携わる行政職員など若者の支援者を対象とした「日本青年館フォーラム」や、青年自身を対象に地域活動の意義や手法を学ぶ「ユースカレッジ」など、その時代に求められる青年活動への支援事業が挙げられます。研究者や社会教育の現場職員らの力を借りて研究活動を行う「青年問題研究所」も当財団機能の一つにあるため、研究成果を生かしながら事業運営にあたってきました。

2017年の三代目日本青年館竣工に合わせ、これまでの取り組みを生かしながら新たな青年活動への支援の在り方を検討していましたが、就労支援や自立支援など、若者を支援対象とする取り組みが急速に広まると同時に、若者による地域活動が全国的にも広がっていることに着目することになります。特に「まち・ひと・しごと創生総合戦略」と「18歳選挙権」によって若者の地域振興への参画を積極的に支援する自治体が広がりを見せていました。元々、地域に根を張って活動する青年団を支援してきましたから、同じようにふるさとを良くしたいと願う若者を応援する事業を模索し始めます。

若者会議などの活動に関する情報を集めていけばいくほど、若者による地域活動に対する支援が自治体の社会教育や青年教育の枠組みではなく、より広範で多様な施策の中で進められていることがわかってきました。2019年度に当財団で全国の教育委員会に実施した「地域青年活動と青少年教育に関する自治体調査」でも、若者による多様な社会活動やボランティア活動が青年教育事業として捉えられていないことがわかっています。

一方、内閣府が取り組んでいる「未来を創る若者・オブ・ザ・イヤー」表彰では、毎年高校生や大学生を含む若者の地域活動が表彰されています。受賞者の話では、様々な分野で活動する若者が地域や活動分野を越えて学び合う機会は非常に少ないとも聞きました。こうした状況を受け、社会教育や青年教育の分野に限らず、若者グループによる地域活動の事例を集め、発信し、時には調査や分析もしながら、日本青年館がいわば地域青年活動のプラットフォームになることを目標にし、その一環として青年団をはじめとするあらゆる青年活動に取り組む若者の実践交流の場として2019年度から「全国まちづくり若者サミット」を開催しています。

全国まちづくり若者サミット 2021 開催概要

- 期 日：2021年1月30日（土）～31日（日）
- 会 場：zoomによるオンライン開催
- 参加者数：120名（参加登録者数 27都道府県）
- 主 催：一般財団法人日本青年館
- 協 力：日本青年団協議会
- 後 援：独立行政法人国立青少年教育振興機構
- 特別協賛：日本福祉大学
- 運営体制：
ファシリテーター：井口啓太郎（文部科学省）岡下 進一（元日本青年団協議会会長）
島田 茂（元日本YMCA同盟総主事）辻 智子（北海道大学准教授）
実行委員会：伊賀市若者会議（三重県）かわじま☆未来塾（埼玉県）
多摩市若者会議（東京都）学生団体トップファン（山梨県）
一般社団法人NELD（神奈川県）
zoom 配信運営：多摩市若者会議 合同会社 Michi Lab

「全国まちづくり若者サミット2021」プログラム

当初、対面での開催を視野に入れていたものの、新型コロナウイルスの感染拡大を鑑み、参加者の安全を確保するため、12月7日に首都圏等の一部の団体を除いて全面オンラインでの開催とすることを決定した。

2021年1月30日（土）

12:45	オープニング 主催者挨拶 佛木 完（一般財団法人日本青年館常務理事） 課題の提起 辻 智子（北海道大学准教授）
13:00	トークセッション1 「『困りごと』から始めよう」 事例発表：#おうち先生（静岡県） 埼玉県立皆野高校（埼玉県） 綾川町青年会（香川県） 勝山左義長ばやし保存会（福井県） ファシリテーター：島田 茂（元日本YMCA同盟総主事）
14:45	トークセッション2 「みんなちがって、みんないい」 事例発表：特定非営利活動法人秋田県南NPOセンター（秋田県） 秋田県若者会議ネットワーク（秋田県） 魚沼若者会議（新潟県） 富士山わかもの会議 ver2020（静岡県） ファシリテーター：辻 智子（北海道大学准教授）
16:30	参加者交流企画「オンライン謎解きゲーム」 企画・進行：若者サミット「自主企画」実行委員会
18:00	終了

2021年1月31日（日）

13:00	トークセッション3 「宝は足元にある」 事例発表：学生団体トップファン（山梨県） 大正大学地域創生学部（東京都） 珠洲市青年団協議会（石川県） はじまり商店街 ファシリテーター：岡下 進一（元日本青年団協議会会長）
14:45	トークセッション4 「若者をまちづくりの主役に」 事例発表：情熱せたがや、はじめました。（ねつせた!）（東京都） 高森わかもの☆特命係（長野県） 新城市若者議会（愛知県） 鯖江市役所JK課（福井県） ファシリテーター：井口 啓太郎（文部科学省）
16:30	クロージングセッション ファシリテーター：辻 智子（北海道大学准教授）
18:00	終了

あいさつと課題の提起



サミットの開始にあたってあいさつした佛木常務理事は、青年館の立地や歴史、はたしてきた機能や役割について戦前の青年団報や冊子など貴重な資料やパネルを使いながら参加者に語りかけました。



続いて北海道大学辻智子准教授より「課題の提起」がありました。辻准教授は日本青年館が戦前から一貫して若者が出会い交流する場であったことを紹介し、サミットで出会う「異なる他者」との対話こそが新たな活動の種や自らの成長につながることを強調。団体の代表としてだけでなく個人としての考えをもって臨むこと、また、サミットはコンテストではなく学びの場であるとして、成功だけでなく失敗や後悔などにも学びの種があることを訴えました（詳細はP 5に全文掲載）。

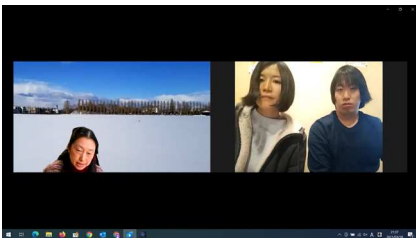
「困りごとからはじめよう」



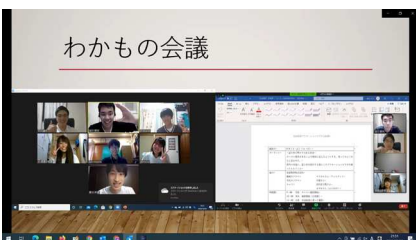
#おうち先生（静岡県）からは、新型コロナウイルスの感染拡大による緊急事態宣言下、学校機能や地域事業が停止する中で取り組んだ、子どもたち対象のオンライン授業を報告。オンラインでの子どもたちの「居場所」を示唆しました。埼玉県立皆野高校は害獣被害をジビエ活用として商品化。「未来をつくる若者オブ・ザ・イヤー」で内閣総理大臣賞を受賞しています。唯一の民俗芸能団体である勝山左義長ばやし保存会（福井県）は芸能存続の危機に瀕する中、子どもたちを継承者として巻き込むことで芸能の継承とまちのにぎわいへとつなげ、子どもたちとの自然体験を中心に青年会活動について報告した綾川町青年会（香川県）が強調した「楽しさ」は参加団体に共通する論点として浮かび上がりました。



「みんな違ってみんないい」

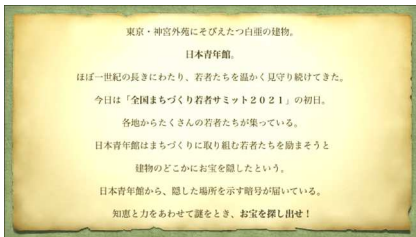


セッション2は「若者会議」で構成されました。秋田県から（特活）秋田県南 NPO センターと秋田県若者会議ネットワークの2団体が登壇。秋田の若者会議のはじまりは2009年。団体の持続性という観点から示唆に富んだものとなりました。魚沼若者会議（新潟県）は今年、成人式が中止になった新成人に向けて商店街に大きな桜の絵を描いたところ、新成人の撮影スポットになり、にぎわいをもたらしたそうです。学生主体の富士山わかもの会議 ver2020（静岡県）からはローカル鉄道のプロモーションなど、多彩な取り組みが報告されました。



全国各地に広がる若者会議。実施主体や活動内容など同じものはありません。グループトークでは世代交代や団体の継続性、行政との関わりなどが論点となりました。

謎解きゲーム



交流企画については、若者サミット昨年の参加団体により実行委員会を結成(団体は1ページに記載)、8月から検討と準備を重ねていただきました。

今回の企画はオンラインでの謎解きゲーム。委員が作成した謎をブレイクアウトセッションで組んだ4人で挑戦し、上位入賞者には賞品をプレゼントというもの。初対面の参加者の交流を促進することが目的です。進行は、一般社団法人NELD(神奈川県横須賀市)の三田さんと多摩市若者会議(東京都多摩市)の高木さん。各チームでは委員が繰り出す謎を解くために知恵を絞り、中には全問正解のチームもでるなど大いに盛り上がりました。

オープニングセッション参考資料 「課題の提起」 辻 智子(北海道大学准教授)

若者サミットの目的は、地域で様々な活動する若者たちが出会い、経験を交流しあいながら、学びあうところにあります。この目的がよりよく果たされるために、皆さんに次のような期待を投げかけます。それは、自分にとっての「異なる他者」と出会ってほしいということです。「異なる他者」と出会うというのは、簡単には理解できない状態に自分の身を置くということです。それは、「どうして?」「なぜ?」と自ら声を発することで初めて立ち現れます。その声を自分に向かって投げかけてみながらあれこれ自分で考えてみる、そんな瞬間をいくつもできることが、私たちの暮らしを豊かにしてくれることにつながると思います。今、私たちはたくさんの情報に囲まれ、日々ものごとが動き流れ急激に変化してゆく、そんな時代を生きています。その中で、流れにのりながらも大事なことを見失わずにいるために、ちょっと立ちどまって自分で考える時間を持つことはとても意味あることです。

そのために、二つのことを提案します。一つは、自分が所属している団体としてだけでなく、個人としての顔をもつてのぞ

んでいただきたい。このような場に来ると、どうしても自分たちの活動や団体を「よく見せたい」とか、「認めてもらいたい」という気持ちになるものです。けれども、そこで終わらずに少し先に歩みを進めてみたいのです。個人に立ち戻る瞬間を意識的につくって、「自分はどう思ったか」「なぜそう考えたか」とぜひご自身に問いかけながら参加してください。

もう一つは、悩み、迷い、戸惑い、自信のなさ、困っていること、そういうものを、ここでは遠慮なく出してください。ここでは成果発表会やコンテストではありません。学びの場です。プレゼンテーションの「うまい」「下手」が一番重要なことではありません。成功の秘訣やうまくいった時の原因・達成感だけでなく、失敗したことや後悔していることにもたくさんの学びの種が詰まっています。そんな学びを皆に提供してくれることを私たちは大いに歓迎いたします。

以上のようなこと大切にしながら、実りある時間にしていきたいと思います。最後までどうぞお付き合いください。

『全国まちづくり若者サミット 2021』
～新型コロナ禍が産み出したもの。
島田 茂 (元日本 YMCA 同盟総主事)

2回目となった今回の『全国まちづくり若者サミット 2021』は、新型コロナ禍での開催となった。日本青年館で参加した一部の実行委員や発表者を除いて、大半の参加者や発表者、そして、私も含めてファシリテーターも Zoom で参加するという、パンデミックが惹き起こした会議革命とも言える方式で開催された。



参加者の募集方法も Facebook 等の SNS で今回の開催を知って申し込んだという割合が多かったとも報告されている。直接出会って語り合うことに越したことはないが、時間的な制約や移動にかかる経費などを考えると、会場とリモート参加を同時に可能とするハイブリット方式は、より多くの人々が参加できる利点がある。

発表の中にも新型コロナ感染症拡大が産み出した活動の紹介があった。学校が休校になる中で、何ができるだろうかと考え、大学生たちが、休校中の小学生を対象に無料のオンライン授業「#おうち先生」を立ち上げた経緯が紹介された。学力重視の授業ではなく、若者の経験に基づいた対話重視の授業は、海外からも参加者がいるほど広がっていった。一人の若者の思いが地域や大学を超えてつながり、SNS を通して参加者が広がるケースが増えて

きている。私の住んでいる富山でも留学する予定だった高校生が新型コロナで留学が中止となり、目標を見失い悩んだ末、3人の仲間と話し合い SDGs を意識した社会貢献活動をしようと決意し、Teena Light という団体を立ち上げた。1月から活動を開始し、SNS を通じて現在富山、山梨、兵庫県 12 校の高校生 60 人が登録し、地域を超えて認知症予防レクリエーション (オンライン)、海外衣類支援、路上生活者衣類支援等の活動を開始している。

今回のサミットの発表では、中央青少年団体協議会に加盟してきた従来型の社会教育団体—青年団やボースカウト・ガールスカウト・YMCA・YWCA などの発表は、2 地域の青年団のみであり、他は若者会議が 5 つ、行政主導の団体が 2 つ、主体的に新たに発足した団体が 3 つ、高校の活動が 1 つ、大学での研究が 1 つ、企業が 1 つという団体の発表となり、多様な発表内容となった。ファシリテーターとしては最初戸惑いがあったが、異なる形態の団体発表によりシナジー効果も期待された。

次の開催に際しては、団体の成立形態、活動内容、団体の抱えている課題等カテゴリーに分けて企画を検討することを提案する。歴史のある社会教育団体、近年に発生した NPO や若者会議、政策的に行政主導でできた団体、コロナ禍で生まれた地域を超えた団体などカテゴリーに分けて、マトリックス的に組むとどうなるか楽しみである。



若者サミットから見てきたもの。

辻 智子（北海道大学准教授）

地域で活動する青年団体（青年団、青年会など）が、全国規模（あるいは世界規模）で、出会い、学び、交流できる場（拠点）として設立された日本青年館の歴史的経緯からすれば、今回の「若者サミット」は現代においてその新たな形を模索する一つの挑戦と位置づけられる。その際の要点は、これまで日本青年館や日本青年団協議会が培ってきた経験と蓄積が、現在、青年団や社会教育と直接的に関係を有していない若者たちとどのように共有可能かということであった。実際の結果から、それらは時代を超えて引き継がれうるという一定の見通しを得たと言える。同じような悩みや思いを抱える「仲間」と時間を共にし、話しあい語りあう中で各々が自分や自分たちの活動を見つめ直したり、解決方法はすぐには見つからなくても問題や課題の所在をそれぞれなりに整理したりする様子が垣間見られ、また、それを楽しんでいるように見えたからである。もちろんこれは推測を含んでいるし、特に全面オンライン開催の第2回目（2021年）では参加者の様子は必ずしも十分に感じとることはできていない。しかし、その場に何か惹かれるものを感じていた若者がいたことは事実である。それはおそらく「共同学習」の体験ではなかったかと考えられる。そしてこれは、現在、別の所で盛んに行われている地域活性化のための催しや社会的企業・起業セミナーとは「ひと味ちがった経験」だったと想像する。

この「ひと味ちがった経験」をここではあえて社会教育・青年教育と表現しよう。青年教育には、お互いを受けとめ認めあいながら一つの集団を形成し、自分たちが楽しいと思うことをやりながら地域とつながり、その活動を通して青年たちが地域で自らの暮らしを紡い



でゆく展望を描いてゆく、このようないとなみを「学び」と「成長」の過程としてとらえ、それを経験できる「場」と「機会」を保障するところに教育の価値を見出そうとの志向性がある。そこには、失敗や挫折、相互の摩擦も含めて自分たちで乗り越えてゆくことや、様々な困難を抱えながらも地域で生きていく覚悟を引き受けてゆくことなども含まれる。時に不器用でたどたどしくも見える、このような過程が大事な学習機会であり、それぞれの生活や地域での暮らしを支える「知」とは、こうしたままならない経験を通して個人にも集団にも血肉化されてゆくものではないだろうか。

社会教育・青年教育には、大人や行政機関・政策者側は青年団体に対して何をすべきなのか／何をすべきでないのか、個人の意思や要求と集団・地域・社会とが齟齬をきたす時、それをどう克服するのか、「社会貢献」や「地域奉仕」が「動員」にならないようにするにはどうすればよいのか、善意から出発した活動でも誰かを排除し差別しかねない事実に対して何が必要なのか、といったことが繰り返し問われ、実践的に検討されてきた歴史がある。法制度や教育行政の一般行政からの独立のしくみ、住民の活動とかかわる職員のあり方など、これまでに行われてきた条件整備や環境づくりは、こうした議論とともに形づくられてきた。

「若者サミット」を通じて私たちは地域で活動している様々な若者たちと出会えた。そこには、高校や大学の正規のカリキュラムで行われている活動や、地域の活性化を若者に求める行政施策、活動支援による報酬で生計を立てている人がいた。多様な広がり新たな展開に興味をかきたてられつつ、個人と社会をともに豊かにするために大事なことは何か、異種格闘の活発な議論の継続を今後もぜひ期待したい。

2年間の事業についての評価

～日本青年館への提言～

岡下 進一（元日本青年団協議会会長）

<はじめに>

コロナ禍における手探りでの開催でしたが、多くの参加者が主体的に動いていただいたことで、実りのある事業となったと思います。特にスタッフの皆さんは様々な想定を準備し、臨機応変な対応と、その能力には脱帽です。今後、他の事業への応用も期待される成果となりました。



私は青年団活動出身者として本事業に携わってきましたので、青年団からの視点でこの2年間の評価を述べさせていただきますことご容赦願います。いろいろな地域で、若者が、多種多様な考え方で活動に取り組む姿を見ることができたことは、この上ない幸せな時間で、活動されている若者の皆さんは、高い評価以外の評価がないことは言うまでもありません。心から賛辞を贈りたいです。

その上で、「様々な見方」があると思って読んでいただければと思います。

<事業の成果>

～若者の地域活動の「プラットフォーム」としての事業、学びの場の提供～

日本青年館が、青年団だけではなく、幅広い若者が行う地域活動を「プラットフォーム」と位置づけて集め、お互いの実践発表を聞くことで学びあう場を提供する事業として実施した。結果、青年団、高校生、大学生、企業者、個人など、様々な青年が取り組む地域活動や、地域へのアプローチの実践を集め、集まった実践を他者が聞く機会を提供し、当初の目標は達成できていると評価できる。

<課題>

①様々な活動から学び、今後の活動に生かす
参加者が「異なる他者」と出会うことで、自分たちの考えや活動が「当たり前」ではなく、

いろいろな「当たり前」があることに気づけたか？「異なる他者」に気づき、その考えや活動に疑問を持ち、今後学習しようと思ったか？「異なる他者」の「当たり前」を学習することで、幅広い自分や組織に成長し、活動の幅が広がったか？などの検証が事業後必要である。

②日本青年館が積み上げてきた成果との融合

日本青年館が全国の青年団活動を基礎に、評価、支援してきた成果は二つの側面がある。ひとつは若者が個人や地域の課題を見つけだし、解決に向けて活動する中で成長する社会教育として、もうひとつはその活動が地域貢献につながる地域づくりとしてである。さらに、活動を通して生まれる人間関係の構築や、若者がその地域で生きる覚悟や自信を生み出していく生きる力に対する成果である。

今回、青年団以外の若者の取り組みを分類すると、以下のように分類できる。

- A 高校生の地域活動（学校が仕掛ける）
- B 行政が仕掛ける若者を集めた地域活動
- C 大学生の地域活動
- D 地域活動を行う若い企業者

AからDの実践と、上述した青年団との評価との違いは以下の通り。

・仕掛けられた土俵では、柔軟な判断は規制され、また、保障された土俵では困難さがなく、成長の過程が生み出されにくい。

・活動の継続について、仕掛ける方にゆだねられ、実践する側にはない。

・企業者については、経営の観点が最優先であることより、社会教育の視点や活動の継続性の重要性が薄い。

・事業後の地域への責任はない（自分がその地域で生きていく覚悟は求められていない）。

また、共通する評価は以下の通り。

・地域活動は大切であるという視点
・若者が地域に目を向ける視点を育てることの評価

・若者が様々な経験を積む評価

・活動による地域貢献の評価

<今後への考察>

①の課題に向けて（次ページへ続く）

ファシリテーターからの提言

日本青年館は、参加者のアフターフォローと前後の関係づくりが必要である。「異なる他者」への質問や疑問に対応する各団体との橋渡し、様々な情報や学習資料の提供など、「プラットフォーム」に情報伝達機能と学習図書館の機能を持たせてはどうだろうか。

②の課題に向けて

青年問題研究所として、青年団とAからDの活動の評価を行い、青年団にはAからDの活動における評価ポイントをどう青年団活動に取り込んでいけるのかの提案を、逆に、AからDへの団体に対し、社会教育の視点などの日本青年館が積み上げている評価ポイントを伝え、今後の活動に盛り込んでいただくプロセスを考える必要がある、そのことが本事業の成果となると考える。

いま改めて「若者サミット」での気づきについて

井口啓太郎(文部科学省)

「全国まちづくり若者サミット2021」から早くもひと月以上が経ってしまいました。私も含めみなさんも年度末特有の忙しい毎日、かつコロナ禍・緊急事態宣言下の落ち着かない非日常をお過ごしのことと思います。私たちは常に日常に追われていて、そんな日もあったかなと、あの二日間もあっという間に忘れてしまうような生き方をしているのかもしれませんが、まさに私がそうです。だからこそ、誰かとあの二日間をふり返り言葉にして、読んでもらうことでもない限り、あの時に感じた「気づき」を意識できません。みなさんも、この報告書を読み、感じたことをSNSなどに記してみたり、参加していた仲間と話してみたり、サミットをあえて今ふり返り共有してみませんか。それ自体が大事な「学び」なのだと思います。

さて、私もサミット当日を思い起こしながら考えたことを3点だけ書いてみます。

第一に、たくさんの団体の発表を聴いて、こ



れだけたくさんの若者たちが、まちづくりに参画していることに希望を持ちました。「人口減少」とか「消滅可能性」とか田舎は都市から暗いことばかり言われ行政は何か手を打たなくてはいけない、「地方創生」だ、「持続可能なまちづくり」だと、今になって若者たちを応援しはじめましたが、どっこいそんなおじさんたちの思惑を見透かしながら、若者たちは存分に楽しんでいる。そのことがよく伝わりました。私もまだ40歳過ぎたあたり（おじさんですね）、一応30歳代までは若者たちの活動に直接関わっていた公民館職員だったので、みなさんの楽しそうな姿が羨ましくなりました。

第二に、でも一方でプレゼンとか成果とかきれいに見せすぎではないかとも思いました。サミットは助成活動発表会でもコンテストでもありません。「楽しい」の先にある切実な願い、活動の失敗や課題、仲間との行き違いや葛藤、生活上の悩みなどが無いわけじゃないはず（私もたくさん持ち合わせています）。それをもっとみなさんと議論したかった、そこから「学びあい」があったという消化不良感も残りました。

第三に、さらに言えば、地域にはもっといろんな若者たちがいるはずなのに、どこか同質性の高い仲間での活動になっていないかな、と疑問に感じることもありました。

私はいま、障害のある人の生涯学習の支援を考える仕事をしています。これまで障害者は社会のあらゆる活動から「排除」されてきました。もちろん私たちは「排除」したことはないと思います。でも、私たちは多数派にとって居心地の良い社会、少数派にとって居心地の悪い社会を自覚なく作ってきてしまいました。例えば聴覚障害のある人が参加したいと言ってくれたら、いつもの話し合いの会議はどうしますか。そもそも視覚障害のある人に情報が届くようなチラシを作っていますか？ そんな風に改めてじぶんたちの活動を見直してみることで、「誰も取り残さない地域」が少しずつできていくのかもしれませんが。

ちょっと長くなりました。また来年お会いして学びあえたら嬉しいです。

データでみる若者サミット

1, 年齢構成

項目	人数	%
10代	16	13.3
20代	53	44.2
30代	22	18.3
40代以上	17	14.2
不明・無回答	12	10.0
合計	120	

2, 性別

項目	人数	%
男性	70	58.3
女性	46	38.3
不明・無回答	4	3.3
合計	120	

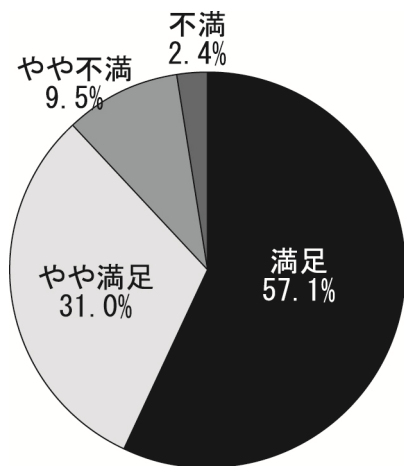
3, 属性構成

項目	人数	%	項目	人数	%
若者団体	54	45.0	地方議員	4	3.3
青年団	12	10.0	高校教諭	2	1.7
大学生	8	6.7	大学教員	2	1.7
高校生	7	5.8	その他	22	18.3
自治体職員	9	7.5	合計	120	100.0

※「若者団体」に属している高校生・大学生は「若者団体」に含めた。学籍のある人数としては高校生12名、大学生37名。

参加者アンケート（有効回答数：42）

1, 事業の満足度



2, いただいた声（抜粋）

- ・1日目の謎ときゲームについて実行委員会の方が一生懸命準備してくれていたことが伝わった。感謝。
- ・はじめての参加でした。たくさんのヒントを頂き感謝です。これからのまちづくりを計画する上で

大変勇気を頂きました。次回の開催にも参加したいと思います。

- ・多様な地域の方々の想いと実践を知ることができて、ありがたかったです。感想を共有する時間もあったので、他の参加者の視点で考え直すこともできましたし、発表者の方と同じグループになるとお話しすることができたのもよかったです。
- ・イベントの参加方法をもっと幅広くしてほしい。
- ・発表前後の間隔が短く、頭の切り替えが難しかったので、もう少しゆとりがあると良かったと思います。
- ・運営の皆様大変お疲れさまでした！熱意溢れる登壇者に心を動かされました。次回も楽しみにしております。
- ・発表の巧拙はむしろ楽しく興味深かったが、トーク、ディスカッションにはもう一工夫あった方が良い。

日本青年館ホテル

神宮外苑新時代へ



インターネットからのご予約

<https://nippon-seinenkan.or.jp>

(ベストレート保証)

日本青年館ホテル **検索**

〒160-0013

東京都新宿区霞ヶ丘町 4-1

TEL 03-3401-0101

FAX 03-3405-5830

